若手コーナー

自画像

クリニックひがし野 院長　島袋　敏秀

ただいま琉大病院より帰院し外来診療中。実は今年の4月直腸Caの診断にて現在2週1回に化学療法と月～金曜の放射線療法中である。開業3年目にて今現在借金の塊みたいな病院です。主治医の御計らいにて外来が見れるようにしてもらっている次第。テネスムスや患部の痛みなどにて外来診療に無理が生じるまで、頑張るつもりである。さて本題に戻って若手勤務医へ送るアドバイス、エールなどとなってますが、とりあえず開業までの私の生き様で参考になればと書いてみる。私は、28歳で琉大医学部入学した。それまで医大受験浪人中でありながら通常の青春を謳歌し、遊び歩いていた。入学時2児の父となっていた。最初の子が出来たと聞いた時、はじめてはっと我に返り自分の立場を認識した。

このままで人生終われない、初心に帰り‘医者にならなければ’である。両方の両親を説得し、御願いし2年間の約束にて再度真剣に浪人を始め、約束の2年目に合格できた。学生時代は、アルバイトに明け暮れたが何とか現役で卒業でき、現役で国試も取れた。同級生たちは、卒業旅行などとヨーロッパ、アメリカと飛び立ったが、その時3児の父になっていた自分にはその余裕など無くて、日当5千円にて中部徳洲会病院に御世話になった。そこは研修医が自分ひとりで、まるで野戦病院のように四六時中救急車が来院した。参考書を読みながらなどとてもじゃない。耳学問、目学問にて通り過ぎ、夜中や患者が落ち着いたときに始めて片手間に本が読めた。落ち着いて読める訳ないからとても実にならず、親切な先輩に教えを請うことが出来なんとか研修医を卒業できた。その間内科の研修医でありながら外科の緊急OPeに緊急呼び出し受けたり、結構な多忙であった。しかし振り返ってみると、そのため短期間のうちに多様な貴重な症例を経験することが出来、今の自分があると思いありがたかった。私は医者とは人の生き死が診れる者との認識が元来あり、そのためには自分の専攻は循環器か脳外科と考えていた。しかしながら青春の遺産で25歳の頃利き手の手首の腱、動脈などすべて断裂してしまい、主治医にもう右手は使えません、左ききになれば！今からでも遅くないよと言われかなり悩み落胆したが、やるしかないのでその後より左ききになるため頑張ってきた。これでは脳外科など繊細なOPeが出来るわけが無く内科的に何とか生き死が診れる循環器を専攻した。手首の手術入院中も浪人中も左ききになるための猛特訓のおかげで何とか心カテ、PCIも人なみに熟せたと思っている。現在は両刀使いである。で現在にいたった。さて今でも思う事だが医者は、耳学問、見学問、そしてその手技を先輩諸先生から盗むものである。先輩緒先生によってはかなり治療方針、治療方法が異なるものである。そこにはそれぞれの性格、個性が見て取れるように思う。それ故そう簡単には教えを請うでも教えてくれないものである。これは意地悪ではない。自分が長年培ってきた治療方針、治療方法、そう簡単には自分も教えようとは思はない。金魚の糞のようにまとわりつきやる気、必死さが感じられる研修医でなければである。最近研修医には、まったくそれが感じられない、あそこの病院は何も教えてくれないからと医局に報告しているそうな、其れよりも先輩諸先生が教えたくなるような性格や個性、やる気を発しているかだと思う。最後に自分の医者像―可能な限り生きて返す、歩いて来院した人は歩いて返す、少なくともADLその他可能な限り改善を願うである。そのためにはまず自分の力量を知る必要がある。早期に諸先輩へのコンサルト、そして適切な判断にて必要なら高度医療の他院（琉大病院、中部病院など）への紹介も遅れないようにするである。皆さん寝る暇も惜しんで頑張ってください。私も頑張っていくつもりです。これもまた自分の人生。